

# 世界をみつめて4

## 言葉と平和

莊中 孝之

じつはもう1年以上海外に行っていない。それどころか最近、ときおり遠方で開かれる学会や研究会に参加するため以外には、近畿圏から外に足を踏み出すことすら 못했다。そんな私がこのようなコーナーの連載を担当して、本当に「世界を見つめる」ことなどできるのだろうか、自分でも内心はなはだ心もとなかった。でも最近、この私に勇気と自信、そして希望を与えてくれる、一人の少年との素晴らしい出会いがあった。といってもそれはある新聞紙上でのことだけれども。

彼の名前は白田輝（ひかる）君。1994年、1歳の誕生日直前にマンションの5階から転落した。幸い生死の境は脱したが、まったく言葉もしゃべれず、筋肉一つ自由に動かせない体になってしまった。その後も脱臼、劇症肝炎、気胸、肺炎など、さまざまな体の不調、障害に見舞われ、入退院を繰り返した。そんな輝君が、特殊な文字入力スイッチに出会ったのは2006年のことであった。50音を読み上げる音声に対する、わずかな体の反応を拾って、介助者が文字を入力する。

初め輝君は何の反応も示さなかった。しかし4回目、かすかにスイッチが動いた。1時間余りかけて表現したのは、次のような言葉であった。「せかいからせんそうがずっととだえて てきみかたきめずに くらしていけたら いいのに」。この文字入力ソフトを開発した、国学院大学の柴田教授は言う。「1字ずつの入力だったが、だんだん、とてつもなく大きな話だとわかってきた」。自分の息子が言葉を理解しているに違いないと信じていた、母親の真左子さんですら、「こんな世界を持っていたとは」と驚いた。

それから輝君の言葉は奔流となってあふれだす。「すばらしいのはつらくても ことばがあることです ことばこそ ほくたちにとってひつようなものなのです」。彼はベッドの上で、ただじっと人の言葉を聞き、自分の頭の中だけで言葉を使って過ごしてきた。しかも

その言葉を一度も誰にも話すことがなかったので、逆にそれはどんどん研ぎ澄まされてきたのだ。「しは ししのようにおそいかかってくるかもしれないが ちいさいほくは ひとり くとうをつづけていくつもりです」。「くなん それはきぼうへのすいろです。けっしてあきらめてはいけないということをおしえてくれます」。彼はいつも希望を胸に抱いて、ずっと未来を信じつづけた。そして自分の存在を越えて、広くはるかな場所を遠望していた。

「よもすえというかんがえかたは まちがっていて かのうせいにかけるべきです。にんげんのことを あきらめてはいけないとおもいます。よきひよきときに めぐりあうことを しんじよう」。祈りにも似たその言葉は、静かに、そして深く私の心に響く。「きぼうが すっかり きのうのおもいでになってしまったら すなおなきぼうの しにたえたきみよ かなせかいが おとずれるだろう ついにきぼうのすみきったせかいが おとずれたとき しあわせはどういうかたちになるのだろうか しあわせはちいさなよろこびとなって しあわせとよぶひつようもなくなるだろう」。彼は病床で確実に世界を見つめ、言葉を通じて平和を訴えていた。

そして2009年2月、こう表現した。「きぼう そらにおもいえがきながら このきれいなとびらをあけて いいみらいにむかって うえをみつめながら くるしみは きのうのものとして あかるいゆめをみながら あるいていこう」。それが絶筆となった。4月26日朝、母親が目覚めると、かたわらで輝君は息絶えていた。たった16年間の短い生涯であった。でも彼の残した珠玉の言葉は、きらきらと輝きながら、私たちにはっきりとその大切さを教えてくれる。そしてまた純粹に人を信じ、世界を信じ、平和を信じることの素晴らしさを。

しょうなか たかゆき(准教授・英文学・比較文学)